化石採集の鬼

―自然を愛し、自然の声を聞いた―

1

2

貢献

昭和36年、日吉村最初の名誉村民として表彰された大野作太郎氏。その生涯の情熱を、地質学研究・化石採集へと注ぎました。

明治41年3月、愛媛師範学校を卒業後、教師の職に就いた大野氏。宇和島市岩松、三間、北宇和郡日吉などの小学校長を歴任しました。教師を退職後、日吉地区へと帰郷した大野氏は、昭和18年に当時の日吉村信用購買販売利用組合の組合長に就任。

また、昭和22年5月から昭和32年5月までの間、日吉村議会議長を務め、日吉村初となる上水道施設である下鍵山地区上水道施設を完成させるなど、戦後の転換期における村政に尽力しました。

地質学との出会い

一方で、青年期のある日、地質学者であった江原眞吾氏の講演を聞いた大野氏は、地層を分析することで大昔のできごとを知ることができる地質学に興味を持ち始めました。

当初は、どう発掘し、どう調査したらいいのかさえも分からなかった大野氏。独学で得た知識や江原先生などの地質学を専門とする方々との交流を行いながら、その教養を深めていきました。

世界的発見

県内各地に足を運んで、地層の調査を行い、化石の採集などを通して、さまざまな自然の声に耳を傾けてきた大野氏。大正11年、当時の東宇和郡魚成村・田穂西地区の石灰岩から、ついに新種の化石を発掘することに成功しました。

大野氏が発掘したアンモナイト(菊石類)の化石の一種は、大野氏の名前にちなんで「ミーコセラスオーノイ」と命名。その後、江原氏によって、今から約2億年前の「下部三畳紀」の地層であることなどの論文が発表されると、世界的な発見として注目を浴びました。

また、江原氏はこれを機に本格的に四国地方の地質研究に没頭。昭和5年に「四国の地質」と題した論文を発表し、博士の称号を得ることとなりました。その偉大な功績の影には、化石資料の提供や研究の手伝いなど、大野氏の献身的な協力があったと伝えられています。

深まる交流

昭和24年当時、日本が食糧難だった時代。地質学者を目指す学生たちにとっては、その貧しさから調査や研究をすることが困難な時代でもありました。